第二回The World Meeting of Popular Movements　教皇フランシスコ挨拶

ボリビア Santa Cruz de la Sierra

2015年7月9日

半訳　by齋藤　20191220　原文は[ここ](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2015/july/documents/papa-francesco_20150709_bolivia-movimenti-popolari.html)

（日本語では意味のとり難い箇所を赤字で示した。）

兄弟姉妹の皆さん、良い午後をお過ごしですか。

数ヶ月前、ローマで私達は最初のWMPM会議を持ちました。そこでは私の考えを皆さんに聴いて頂き、共に祈りの時を持ちました。今回も、皆さんが熟議して下さる姿を拝見しとても嬉しく思っています。私達の地上世界で今、疎外された者達（the excluded）が経験している深刻なinjustice、これに打ち勝つ最善の方法は何か、皆さんは熟議して下さっています。また、モラレス大統領にはこの会議開催に向けて尽力して下さいました。本当に感謝しています。

ローマでの第一回会議で、私はとても美しいsomethingを感じ取りました。友愛、決断、能動的関与、justiceを求める渇望といったものです。今日ここSanta Cruz de la Sierraにおいてもそれらを感じ取ります。タークソン枢機卿、ありがとう。この場を準備してくれた、貴方と貴方が率いる正義と平和聖職者会議に感謝します。教会の多くのpeopleがこのpopular movementsに親近感を持ってくれています。本当に嬉しく思います！　教会が、皆さん全てに門戸を開き、皆さんを抱きしめ寄り添い、popular movements協働活動が広まりました。各教区の正義と平和支部に大規模かつ継続的に広まりました。本当に嬉しく思います。この出会いを更に深めるよう、司教達、司祭達、平信徒達、そして都市部周辺部の社会組織の皆さんにお願いします。

今日、神が私達をこの場に集わせて下さいました。聖書はこう教えます。神は、神の民の叫びに耳を傾けて下さる、と。ですから、三つのL、land, lodging and laborを全ての兄弟姉妹にお与え下さいという皆さんの声に、私の声を重ねます。また、先回申しましたことを繰り返します。これら三つのLは、sacred rights（聖なる権利）、即ち、闘いとる（fighting for them）に値する重要なものです。南米および世界中の、これらを奪われた者達の叫びが、聞き入れられるよう祈ります。

1．何よりも、認識の変化が必要なのだということから話を始めましょう。誤解なきようハッキリ言います。これは、南米をはじめ人類全体に共通の問題なのです。即ち、一つのstate（国家）が単独では解決出来ない地球的問題（global problems）なのです。このことをハッキリ分かるために次の幾つかの質問について考えてみましょう。

私達は本当に、これには何か問題があると気づいていますか？　即ち、土地を持たない農民が沢山いること、住居（すまい）を持たない家族が沢山いること、働く権利を持たない労働者が沢山いること、尊厳が尊重されないpersonsが沢山いること、これには何か問題があると本当に気づいていますか？

私達は本当に、これには何か問題があると気づいていますか？　即ち、極めて身近に、無分別な戦争が繰り返され仲間内の内紛が続いていること、これには何か問題があると本当に気づいていますか？　世界中の土壌、水資源、生物多様性が日常的に危険にさらされていること、これには何か問題があると気づいていますか？

もし本当に気づいているなら、こう続けられても構わないはずです。即ち、私達はchangeしなければならないしchangeしたいと思っているはずだ、と。

皆さんは、参加申込状や会議での発言で、疎外と不正義の多様な形態を職場でも近隣でも地域じゅうで経験した、と述べています。多様多数の疎外と不正義を、多様多数の場面で経験した、と。実は、これら多様な疎外と不正義の一つ一つは見えない糸で繫がった一体のものではないでしょうか。即ち、それぞれ独立の問題ではない。どうですか皆さん、一つ一つをつないでいるこの見えない糸が感じられますか？　これら複数の破壊的realitiesは、既に全地球に広まった或る一つのsystemのそれぞれ別の部分なのだと、私達は気づいているのか、私は少し判然としません。既に全地球に広まった或る一つのsystem、これが利益至上主義（the mentality of profit at any price）、即ち、自然破壊や社会的疎外には無頓着のまま何としても利益を獲得したいという精神構造を、私達に押しつけているのです。このことを私達はキチンと気づいているでしょうか。

もし皆さんがキチンと気づいているならば、私はこう主張します。私達は変革（change）を望む。本当の変革、社会構造変革を望む。こう言って全く差し支えないはずです。何故なら今やこのsystemは我慢ならないものだからです。農民は我慢ならないと感じ、労働者は我慢ならないと感じ、communitiesは我慢ならないと感じ、peoplesは我慢ならないと感じています。そもそも地球自身 -- our sister, Mother Earth, as Saint Francis would sayが、我慢ならないと感じています。

ですから私達は、私達の生活、近隣、日々のrealityの中に変革を求めます。しかもこれは全地上世界に影響を及ぼす変革です。何故なら、地球規模の相互依存性（global interdependence）があるために、局地的問題にも全地球的対応が必要となっているからです。そう、globalization of hope（希望の全地球化）を起こす必要があります。即ち、peoplesから始まりthe poorに根付いたこの一つの希望が、疎外と無関心の全地球化（globalization of exclusion and indifference）を置き換えなければなりません！

今日は皆さんと一緒に、私達が必要とするこのchangeについて考察してみたいと思います。つい最近私がclimate change（気候変動）問題について回勅を出したことを皆さんは御存知でしょう。ただ、ここでは少し違った意味のchangeについて話したいと思います。そう、positive change。私達にとって善いchange。あるいはa change which is redemptive（罪の贖（あがな）いとしてのchange）とも言えます。つまり私達に必要なchange。こういったchangeを皆さんが待ち望んでいることを私は重々承知しています。皆さんばかりではありません。私が参加する様々なmeetings様々な訪問先で、こういったchangeに対する期待、切望、憧れを感じます。即ち全地上世界のpeopleがchangeを熱望しています。現行systemから恩恵を受けているはずの小さなminorityでさえ、現行systemに不満足であり落胆しているのです。多くのpeopleがchangeを待ち望んでいます。個人主義への隷属とそれが惹起する絶望から私達を解放することがcapableなchange、これを多くのpeopleが待ち望んでいます。

しかも、兄弟姉妹の皆さん、一刻の猶予も無いかもしれません。つまり私達自身はまだバラバラになってはいませんが、私達のcommon homeである地球は私達によってバラバラに壊されようとしています。科学界の同胞達は今、こう気づいています。それはthe poorが長年警告していたこと。生態系に重大損傷が、それも恐らくは回復不可能な重大損傷が及びつつあるということです。つまり罪に対する容赦ない罰が、地球、全世界のpeoples、そして個々人のpersonsに下されようとしているのです。しかもこの痛打、死、破壊の背後には、カイサリアのバシレイオス – 四世紀、初期の教会神学者の一人がthe dung of the devil（悪魔の糞（くそ））と呼んだものの異臭がただよっています。悪魔の糞とは、金銭支配の飽くなき追求（an unfettered pursuit of money rules）のこと。これにより共通善の働きは忘れ去られます。資本（capital）が一度でも偶像として崇（あが）められ人々の意志決定を左右するようになってしまえば、あるいは、金銭欲が一度でも社会経済システム全体を差配するようになってしまえば、それは社会全体を滅亡させます。男も女も人間全てを犯罪者とし奴隷化します。人間としての兄弟姉妹愛を破壊し、人々を敵対させ、私達がハッキリ見てきたように、私達のcommon homeである地球、sister and mother earthを破壊します。

これ以上この巧妙な専横がなす悪行の数々について私が述べる必要はないでしょう。皆さんがシッカリと御存知のはずです。あるいは、今日の環境危機・社会危機を生じさせているstructural causes（社会構造的元凶）についても説明する必要はないでしょう。私達はいわゆる過剰診断に陥っています。つまり言葉ばかり紡いで悲嘆と負の側面に時間を弄しています。日々、この様な暗いニュースに接し、私達は打つ手が無いように感じ、自分のことだけ、自分の家族と友人だけを気にかけるしかないと思っています。

では、どうすれば良いのでしょう。古紙、古着、使用済み金属の回収でしょうか。そうだとして、これで食卓に十分な食べ物を揃えるだけのお金を稼げるのでしょうか。あるいは、職人、露天商、トラック運転手、虐げられた労働者など、労働者としての諸権利を行使できない場合、どうすればいいのでしょう。農家の主婦、原住民の女性、big corporationsの支配から逃れる術のほとんどない漁師はどうすれば良いのでしょう。私が住む小さな家から出来ることは何か。私が住む掘っ立て小屋、部落、居留地、つまり日常的に差別と社会的無視に出くわす場所から何が出来るのか。そこで暮らす学生、young people、社会活動家（activists）、徒手空拳のまま希望と夢だけは心に満たし隣人を訪ねる宣教師達が出来ることは何か。実は、沢山のことが出来ます。本当です。謙虚に生活し搾取される困窮者、経済的に恵まれない人々である皆さんにも出来ることは沢山あり、また実際沢山のことを行っています。私なら、人類の未来は皆さんの手にゆだねられているとさえ言うでしょう。組織化し創造的代替策を実行する皆さんのability（法律によって正当とされた能力）を通じて、あるいは、三つのL (labor, lodging, land) – この表現気に入って頂けました？ -- を確かなものにする日々の努力を通じて、即ち、国、地域、世界レベルの大きな変革プロセスに皆さんがproactiveに社会参加することを通じて（through your proactive participation in the great processes of change on the national, regional and global levels）、沢山のことを行えます。気を落とさず頑張りましょう！

2．二番目に、皆さんはchangeの種蒔く人でもあります。ここボリビアには私の好きなphraseがあります。“process of change”です。changeとは、何か政治的意志決定や社会構造変化の結果として或る日突然生ずるものではありません。苦い経験を通して既に私達は知っています。即ち、心と精神の誠意ある転向を伴わない社会構造改革は、遅かれ早かれ官僚主義化、腐敗、失敗に結局は終始します。そう、心のchangeが根本に無ければ為りません。だから私は“process”のイメージが好きなのです。一連のプロセス、つまり、遠方にまで出かけ至る所に種蒔きし水やりを欠かさないようにする、すると、他の誰かが心に芽吹きを感じ、権力ある地位を占め即時の結果を出す野望を捨て、本来の自分に戻る。この選択肢の特徴は、何か地位を占めることでなく一連のプロセスを引き起こそうとすることにあります。私達一人一人が、この様に分化した複合体（a complex and differentiated whole）のそれぞれ一部分となり、適宜に相互作用しあうのです。即ち、それぞれの私に課せられた神意（a destiny）あるいは意義を探し、尊厳ある生き方あるいは「良く生きる」を模索し、こういった意味で価値ある生き方をしようとするpeoplesとなるのです。

popular movementsのメンバーである皆さんは、兄弟愛によってinspireされた各々のworkを実行し、社会不正義に対し反対の立場を明確にします。困窮者の瞳の奧に見入り、窮地にある農民、貧困労働者、抑圧される原住民、住居を失う家族、検挙される難民、失業状態にある若者、搾取される子供達、薬物の売人に占拠されたヒスパニック地区の銃撃戦で子どもを殺される母親達、女衒（ぜげん）に娘をさらわれる父親達．．．これら一人一人が名前を持ち顔がある人間だということに思いを致すとき、私達の心は悲しみと痛みに張り裂けます。そして心の底から揺り動かされます。私達全員が．．．揺り動かされます。なぜならそれは、単なる冷たい統計数字ではなく我が身の痛みとして、困窮者達の痛みを「見て聞いた」からです。これは、抽象的理論立てや饒舌な義憤とは全く異なります。これは私達を揺り動かし、他者達と一緒になって進んでいこうという決意を促します。こういったcommunity actionを生む感情は、単なる理性だけでは説明できません。それにはpeoplesだけがunderstandできる意味の加重（a surplus of meaning）が必要であり、これが本物のpopular movementsの特別な感覚を生み出すのです。

日々、皆さんはこの様なpeople’s livesの嵐に巻き込まれていることでしょう。皆さんはその大義を私に教えてくれましたし、ブエノス・アイレスの司祭を勤めていたときからずっと、私は皆さんと共にこれらstrugglesに参加してきました。姉妹兄弟の皆さん、皆さんは、受け入れたわけでもなくむしろ積極的に抵抗しているにもかかわらず次々と降りかかってくる様々な形態の不正義のまっただ中、困窮地域において様々な些事をこなしながら、金銭という偶像崇拝、即ち、人間を疎外し堕落させ殺していくシステムの言うことを、一切拒否し続けて下さっています。皆さん本当にありがとう。疲れも知らず働く皆さんを私は見てきました。耕作地を保全し穀物を収穫する農民達のために、その土地とcommunityの為に、より尊厳ある地域経済のために、家と居留地のライフライン整備のために。彼らを助け、生活インフラを整備し持ち家を持てるように活動を続けています。更に皆さんは、多くのcommunity活動を押し進めて、その必要性を誰も否定できないほど本質的な権利（a right）、即ち、三つのL、land, lodging and laborを確かなものにするために尽力しています。

このことはシッカリと根付いています。ヒスパニック地区で、農地で、事務所で、労働組合で。そして、他者達のいる中で近隣トラブル – これは地上世界には付きものです。また私達皆が持っているものです。 -- と小さな数々の英雄的行為とを、日常的に共有しながらも自分自身を見失わないでいるabilityもシッカリと根付いています。このabilityが、愛の掟の実行を可能にします。それは、概念や理念を基礎にしたものでなく、むしろgenuine interpersonal encounterを基礎にしたものです。この様な出会いの文化をシッカリと築くことが必要です。概念や理念は愛の対象にはなりません。誰も概念や理念を愛することはできません。私達はpeopleを愛するのです。Commitment, 即ちtrue commitment（真の積極的関与）は、男と女の愛、子どもやお年寄りへの愛、peoplesやcommunitiesへの愛…、私達の心を満たす名前と顔への愛、これらから生まれ出るものです。これらの希望の種が私達の惑星地球の隅々にまで忍耐強く蒔かれ、次に、排斥運動の暗い影に抗して力強く育つ芽生えから優しさの大きな木々がシッカリと立ち上がり、そうして生まれた大きな希望の森が、私達の地上世界に酸素を与えてくれることでしょう。

だから皆さんがこうした芽生えのケアを手ずから行って下さることを、大変嬉しく思っています。と同時に、より広い観点からこの希望の森全体を守って下さっていることに感謝します。つまり皆さんのworkは、それぞれの特定分野に集中する一方で、貧困、格差、排斥といった一般的問題をその根本から解決するという地平線に向かって、遂行されています。

この皆さんのworkにお祝いを述べたいと思います。各国の法律によって既に正当化された諸権利（legitimate rights）を守ることも大切ですが、排斥を行う或る種のglobalizationに対してa humane alternative（人道的選択肢：国境を跨いだ難民保護など）を構築できることもpeoples and their social organizationsの本質として重要です。皆さんはchangeの種蒔く人です。神が皆さんに、勇気、喜び、不屈の精神、そして種まきを続ける情熱を与えて下さるよう祈ります。何時か必ず豊かな実りの時を迎える、と心に刻みましょう。必要なleadershipとして私が皆さんにお願いするのは、創造的であること、そして地域のrealitiesに根ざすことを決して止めないことです。何故なら、高貴な言葉を不当に使うことに長けた虚言好手達が、流行の知識を広めイデオロギーの立場をとるように仕向けてくるからです。しかし堅固な基礎の上に家を建てる皆さんは大丈夫。実際のニーズ、兄弟姉妹の生きた体験、農民達と原住民達、排斥されたworkersと辺境に追いやられた家族達、これらに根ざす皆さんは確かにthe right pathの上を進んでいます。

このprocessから疎遠な立場に居続けるなど、福音宣教を旨とするthe Churchは出来ないし、してはいけません。実際、沢山の司祭と司牧者が世界中の疎外された人々に寄り添い励ますために膨大な職務をこなしています。協力者達と共に、ビジネスを手助けし、住まいを整え、健康・スポーツ・教育の分野で存分に働いています。私は確信しています。popular movementsと共に働く尊敬すべき協力者達が、これらの努力に新しい生命を与えprocesses of changeを力づけていくのだと。

常に乙女マリアを念頭に置きましょう。ローマ帝国の辺境地に人知れず暮らしたsmall people出身の謙虚な一人の少女。僅かなおくるみ布と豊かな優しさで馬屋をイエスの家へと変えた家なき母。マリアこそ、justiceの産みの苦しみにあえぐpeoplesにとって希望の印です。ボリビアの守護の聖人であるOur Lady of Mount Carmel（カルメル山の聖母）に祈ります。どうか私達のこの会合がchangeのパン種となりますように。

3．三番目そして最後に、この歴史的瞬間に重要なtasksの内容について私達全員で考察したいと思います。なぜなら、兄弟姉妹全てにとってbenefitとなるa positive changeを私達は望むからです。これは私達の了解事項です。また、changeの内容を豊富にするのは、governments, popular movements and other social forcesの協働作業だというのも、私達の了解事項です。しかしながらchangeの内容を具体的に明確にするのは容易なことではありません。言い換えれば、私達の求める兄弟愛と社会正義の計画を具体的に実現できるa social programを明確にするのは容易なことではありません。ですから勿論、この教皇からレシピをもらおうなんて期待しないで下さい。教皇も教会も、social realityの解釈について独占権を持ってはいませんし、現代的事柄について解決案を持ってはいません。敢えて言うならno recipe exists（この地上世界のどこにもレシピはありません）。歴史とは各世代が紡いでいくものです。先達の足跡を辿りつつ、自分達の道を求め、神が人間の心に据えた価値観を頼りに、各世代が紡いでいくものです。

とは言えやはり、popular movementsに分担してもらう決定的に重要なcontributionを要する三つのgreat tasksを以下に提案したいと思います。

3.1.　最初のtaskは、経済がpeoplesにサービスする様にすることです。もとより人類社会と自然環境が、お金にサービスするなんてあってはなりません。更にいえば、お金がサービスするのでなく支配する、疎外と格差の経済に対しても私達は断固としてNOと言います。この経済は人殺しです。この経済は人間を疎外します。この経済は母なる地球を破壊します。

本来の経済（the economy）は、財の蓄積を求めるmechanismではなく、私達のcommon homeである地球の適切なadministration（運営管理）であるべきです。これには必然的に、このhomeのケアへのcommitmentと、このhomeが持つgoodsを社会全構成員にfitting distribution（過不足**衡平**化分配）することへのcontributionが伴います。これは、食糧あるいは「生命維持に必要な食糧」の供給に限った話ではありません。また、このことは既に一歩前進しましたが、皆さんが尽力されている三つのL：land, lodging and laborを保障することでもありません。あるいは、真のcommunitarian economy -- それはChristian inspiration経済とも呼ばれます -- においてはpeoples’ dignityとその”general, temporal welfare and prosperity”（地上世界における福祉と繁栄）が確かなものとされなければならない[[1]](#footnote-2)はずです。（この表現は約50年前の回勅にあります。イエスも福音でこう述べています。渇きを訴える者にコップ一杯の水を無料で与えた者は誰でも天の国で思い出してもらえる。）勿論これら（dignity, welfare, prosperity）の中に三つのLが含まれます。その他にアクセス出来るものとして、教育、health care、新技術、芸術・文化の示威運動、通信、娯楽・スポーツも含まれます。あるいは、現在の地上世界で正しい経済の一例（a just economy）も示しましょう。それは、誰もが子供時代を欠乏なく享受できる条件を備えていなければなりません。若いときに自分の才能を磨き、社会人になってからは諸権利をフルに行使して働き、高齢になってからは尊厳ある隠退生活を享受できる。人類社会が自然環境と調和した中で構築され、生産と分配の全体システムが生まれる。そこでは、各個人のabilitiesとneedsが社会生活において適切に表現されているはずです。ここに参加の皆さん、そして他のpeoplesの方達、これらの要求は簡単で美しい一つの言葉で言い表せるでしょう。即ち、”to live well”、これは”to have a good time”と同じではありません。

この様な経済は、望ましいだけでなく必要であり、また可能でもあります。ユートピアでも幻想でもありません。非常に現実的な見込みがあります。私達が達成できるものです。この地上世界で利用可能な資源、また、peoplesによる世代間労働と色々な創造性とによる実り、これらにより”each man and the whole man” [[2]](#footnote-3)のintegral developmentは十二分に果たせるはずです。問題は別の所にあります。現在の地上世界には別の目的の経済システムが存在しています。生産ペースが需要とは関係なく加速され、その上、生産効率の名の下に母なる地球にdamageを与える工業・農業様式が未だに使われています。この経済システムが、沢山の兄弟姉妹の基本的な経済的権利、社会的権利、文化的権利を否定しています。この経済システムはイエスの計画に反します。イエスが伝えた福音の教えに逆らっています。

地球と人間の労働とによりもたらされた果実をa just distribution（或る正しい分配）に供すためにworkすることは、単にphilanthropy（人類愛）に適うだけではありません。それはa moral obligation（倫理的義務）でもあります。何故ならキリスト者にとってthe responsibility（この様な倫理応答責任）はとても重要なものだからです。それはa commandment（或る種の掟）であり、困窮者やpeoplesに、rightによって彼らのものとされるものを、giving（戻す、返納）することだからです。この様な財の万人使用（the universal destination of goods）は、教会の社会教義に見られる比喩的表現と捉えてはいけません。これは財産の私有の考え方に優先するa realityなのです。私有財産は、特にそれが天然資源に影響を及ぼすものであるときは、常にpeoplesのneedsに適うように使われなければなりません。また、この種のneedsは消費活動に限って満たされるものでもありません。満杯に決してならず水がこぼれて来ることのないコップを、困窮者が揺すったときだけ、数滴の水が落ちてくるというのでは不十分です。諸々の緊急事態に合わせて作られた国家福祉プログラムは、temporal（一時的、地上世界的）な応急処置としてのみ考えられるべきです。真の包摂（inclusion）を置き換えるものではありません。包摂とは人々にworkを与えるものです。為す価値がありfreeで創造性があり社会参加につながりsolidary（連帯的）なworkを人々に与えるものです。

この様な道を経て、popular movementsは一つのとても本質的な役割を担うことになります。要望をまとめ異議を申し立てるだけではありません。もっと基本的な創造性を持つことになります。皆さんはsocial poets（社会の詩人）なのです。新たなwork創造者であり家作りであり食糧生産者であり、そして何よりも、地上世界の市場から見捨てられたpeopleのためにこれらのことをする者達なのです。

私は、皆さんの色々な体験をこの目でつぶさに見てきました。金銭偶像崇拝の経済ではパン屑（くず）しか残らないところに、cooperatives（協同組合）や様々な形態のcommunity organizationによって一つになったworkersが、新たなworkを創造する様をこの目でつぶさに見てきました。その内何人かはここにいらっしゃいますね。popular economyの具体例はrecuperated businesses（訳補遺：倒産企業群の救済方法。倒産した一連の類似企業・関連企業を該従業員達がLBOした後に一つのpartnershipにして経営を立て直す。）、local fairs（地域の特産品定期市場）、古紙回収cooperatives等です。popular economyが生み出された直接の切っ掛けはexclusionでしたが、徐々に忍耐強くしかし決然と、自らを尊厳づけるsolidary forms（連帯形態）をとるように変わっていきました。公式市場から取り残され搾取され、奴隷の様な状態だった時の悲惨さを思えば、何という変わり様でしょう！

国家政府も、peoplesにサービスする経済に変えようと、彼らなりの応答責任を持とうとするならば、これらの諸形態をとるpopular economyとcommunitarian productionとを、強化し改良し調和統合し拡大させることを押し進めなければなりません。これには必然的に、行政プロセスを改良し、適切な社会インフラを整備し、この代替セクターにおけるworkersの諸権利全てが十全にguaranteeされることが必要となってきます。この様に国家とsocial organizationsとが協力して三つのLの為に動けば、the principles of solidarity and subsidiarity（補完性原理と連帯原理）が作用し始め、共通善がa full and participatory democracy（訳補遺：全員参加型民主主義、｢おまかせ民主主義｣の反対語）の中に達成される条件が揃います。

3.2.　二番目のtaskは、私達のpeoplesを一つにしてpeace and justiceの道に載せること。

世界中のpeoplesが自らの運命を切り開く者になりたいと思っています。そして平和の内に正義に向かっていきたいと考えています。また、自分達より強力な権力機構から保護監視や干渉を受けて下位の者とされることを嫌います。独自の文化、独自の言語、独自の社会過程と宗教伝統が尊重されることを望みます。peoplesが持つsovereignty（主権）の完全行使を、奪う権利は如何なるactual or established powerも持ちません。もしその様なことが起これば、そこには必ず新たな形態の植民地主義の蠢（うごめ）きがあり、平和と正義の維持が著しく困難となるでしょう。なぜなら「平和はhuman rightsの尊重だけでなく、peoplesのrightsの尊重、特に彼らの独立権の尊重に基づいている」[[3]](#footnote-4)からです。

南米のpeoplesは、自分達の政治的独立を確かなものとするために闘いました。ほぼ二百年もの間、その歴史は劇的なまでに矛盾に充ちています。それは、彼らが完全な独立を勝ち取るまで戦い続けたからです。

南米の多くの国で近年、多くのmisunderstandingsの後にpeoples間のfraternityが育ちました。南米の諸政府が共同でforces（強制執行力）を持つようになりました。それは、国々あるいは地域全体として持つsovereignty（主権）の尊重を確かなものとするためです。これを私達の先達は”greater country”と美しく呼びました。ここでpopular movementsの姉妹兄弟達にお願いがあります。この様なunityを育み大きくしていって下さい。地域全体として平和と正義を育てようとするならば、分離しようとする勢力に遭遇するたびに、unityの維持努力を払わなければなりません。

この歩みは着実に進んでいます。しかしこのequitable human development（平衡的人類発展）を脅かす要因も未だ残っています。即ち”greater country”構想に賛成する国々や、地球上で同様の試みをする他地域で、主権が制限されようとしています。つまり新たな植民地主義が別の姿で現れようとしているのです。或る時それは、名前を伏せた悪富（mammon）の力として現れます。具体的には、corporations、債権取立業者、或る種の”free trade”条約、そして、常にworkersと困窮者に空腹をもたらす緊縮予算、などです。私も加わっていた南米司教団は、アパレシーダ文書でこれに明確に非難の声を上げました。「諸々の金融機関および諸々の多国籍企業は、或る限度を超えるほど勢力を拡大しつつある。即ち、国々から成る或る地域経済を下位のものとし、その国々の人口規模では独自の開発プロジェクトが遂行できないと思えるほど、その国々を無力化する勢力を持とうとしている[[4]](#footnote-5)。」 また或る時それは、高貴を装った仮面の下に現れます。具体的には、腐敗撲滅運動、麻薬取引、テロリズム – これらは国際協調行動を必要とする私達の時代の深刻な巨悪です – などです。各国は対抗手段を持とうとしているようです。しかしそれは、この種の問題解決には殆ど効果がない、または、問題悪化を招くことが少なくない、のいずれかと思います。

同様に、通信メディアの独占もこの新たな植民地主義の別の姿です。目まぐるしく通信機器が更新され消費主義が否応なく煽（あお）られると同時に、或る種の文化単一化が進みます。これはイデオロギーによる植民地主義と言えます。この現象を目の当たりにしたアフリカ司教団によれば、貧しい国々はしばしば「機械の部品、あるいは大きな歯車の一つの歯[[5]](#footnote-6)」の様に扱われるのです。

一つ強調しておきます。それは、人間社会の深刻な問題は全て、states（諸国家）とpeoplesとの国際水準における相互作用なくして解決しない、ということです。何故なら、この惑星地球のどこかで遂行される重要な行動は全て、普遍的、生態学的、社会的、文化的反響を引き起こすからです。犯罪や暴力ですら全地球的（globalized）になりました。結果、如何なる国家政府も、単独では一つも共通応答責任（a common responsibility.）を為し得ない状況です。ですからもし本当にpositive changeを望むならば、私達が相互依存性を持っていることを謙虚に認める、つまり、それを健全な相互依存にしなければなりません。ただ、相互依存はimposition（押しつけ）と同じではありません。つまり、他者のinterests（関心事、利益、やりたいこと、興味、）にserveする者達を下位とするものではありません。植民地主義は、新旧どちらも、貧しい国々をおとしめそれを天然資源と安い労働力の単なる供給源としました。暴力、貧困、強制移民、その他ありとあらゆる悪を、植民地主義国家達は手を取り合って引き起こしました。この原因は正に、辺境の植民地達（the periphery）を中央国家達（the center）にserviceする者、即ち下位の者としたことです。辺境の植民地達の高次発展の権利（the right to an integral development）は否定されてしまった。兄弟姉妹の皆さん、これこそinequality（不平等）です。そしてinequalityは暴力を生みます。警察も軍隊もcontrol出来ない暴力、知性的資源ではcontrol出来ない暴力を生みます。ですから、新旧全ての植民地主義に対して皆さん声を大にしてNOと言いましょう。そして、peoplesの出会い、文化達の出会に対して大きなYESを投げかけましょう。･･･Blessed are the peacemakers.

ここでもう一つ重要項目を取り上げたいと思います。「教皇が植民地主義を話すとき、教会の過去の行いを見落としてないか」とrightlyに言えるかもしれません。後悔の念と共に認めます。神の名の下にthe native peoples of Americaに対して沢山の重大な罪が行われた、と。私の先任者達もこれを認めていました。CELAM, the Council of Latin American Bishopsもこれを認めていますし、勿論私もこれを認めます。聖ヨハネ・パウロ二世の様に私もthe Churchが – 彼の言葉を繰り返しますが --「神の前にひざまずき、教会の息子達娘達が犯した罪の赦しを懇願する」[[6]](#footnote-7)よう願います。更に私は、聖ヨハネ・パウロ二世の様に極めて明確に認めたいと思います。即ち、謙虚に赦しを請う。教会がした数々の攻撃だけでなく、いわゆるアメリカ大陸征服の間にthe native peoplesに対して行われた数々の犯罪に関して謙虚に赦しを請う、と。この赦しの懇願と共に若干の事実を加えるならば、当時何千人もの司祭と司教が、十字架と剣の理論に強く反対していたことを私達は思い出しましょう。厳然として罪を犯しました。沢山の罪を犯しました。そして赦しを請わないできました。だから私達はこれに赦しを請います。私は赦しを請います。とともに、この罪、この重大な罪が行われたとともに、indigenous peoples（訳注：原住民。生来のpeoplesとも解釈できる）の諸権利をdefendした男達女達に豊かな恵みが注がれています。

信仰を持つ者持たない者の別なく皆さんにお願いします。多くの司教司祭平信徒が福音を宣べ伝えてきましたし、これからも宣べ伝えていきます。勇気と従順を携え、丁寧に平和的に。彼らのことにしばし思いを寄せて頂けますか。先程、司教司祭平信徒といいましたが、勿論修道女の方達も忘れるつもりはありません。貴方方は貧しい隣人達に寄り添い平和と幸せのメッセージを運んでいます。これらの人達は男も女も皆、自らを人類の愛と振興という印象的な働きにささげました。多くの場合それは、native peoplesの側に立ち、彼らのpopular movementsに寄り添うものでした…殉教のその時まで。教会とその息子達娘達は、南米のthe peoplesにとっても自らのidentityの一部です。ここ（ボリビア、南米）ではidentityと言えます。しかし他の国々では、これを抹消しようと企む勢力も存在します。何故なら時に信仰は革命につながるものだからです。私達の信仰は悪富（mammon）の専制に闘いを挑むものだからです。今日私達は、中東や他の地域で私達の兄弟姉妹がイエスへの信仰の故に迫害され拷問を受け殺されているのを目の当たりにし愕然とします。間違いだと訴える必要があります。第三次世界大戦、waged peacemeal（訳補遺：平和を食べることで賃金をもらっている状態）に私達は今苦しんでいます。ここで大量虐殺 – この言葉を強調します – が行われています。これを終わらせなければなりません。

南米の先住民運動（Latin American indigenous movement）の兄弟姉妹に申し上げます。私から深い愛着と感謝をお送りします。peoples and culturesをそのままに残してしかも一緒にしようとする皆さんの努力に感謝します。或る種の共生（coexistence）形態、私はこれを多辺体（polyhedric, many-sided）と呼ぶのですが、その中で各グループはa plurality（一つの複数人）を形成し自分達のidentityを保ちつつ、しかもunity（全体が一つになること）を脅かすことなくむしろ強化しています。この様なan interculturalismを求める皆さんのquest（探求の旅）は、native peoplesが持つ諸権利を防衛しつつ各国家が持つ領土保全を尊重するという絶妙の組合せであり、私達全員にとって豊かな励ましの源となっています。

3.3.　三番目のtaskは、恐らく今日私達が直面する最重要課題、即ち母なる地球を守ることです。

私達のcommon homeは略奪され続けました。略奪者が誰も罰を受けないまま荒廃し損傷を受け続けました。これに抗議することを臆するのは重大な罪です。国際サミットが次々と開かれ何も重要な結果が得られないのを見るにつけ絶望が大きくなっていきます。事ここに至ってこの地上世界にはきっぱりと明確に倫理的緊急要請が、それも未だ嘗て為されたことのない緊急要請が発令されました。何らかの既得権益（interests）が – それも普遍的でなく単にglobalな既得権益が、優位となって諸国家と国際的諸機関とを支配し、地球（creation）を破壊し続けることを、最早私達は許すことができません。People and their movementsは叫び声を上げるよう召命を受けています。総動員して要求をだす。平和的にしかし断固として。適切かつ緊急に必要な処置が施されるようにする。神の名において皆さんに頼みます。母なる地球を守れと。このことを私はdulyに（法律に則り）回勅*Laudato Si’*の中に記しておきました。この会合の最後に皆さんにもお配りします。

4.　結論を述べます。繰り返しになりますが、人類社会の未来は、大組織のリーダーや巨大権力やエリート達の手の中にだけあるのではありません。基本的にそれは、peoplesおよびpeoplesのability to organize（法律的に正当とされた組織化能力）の手に委ねられています。そう、貴方方の手に委ねられています。またそうあってこそ、謙虚な信念によってこのchangeプロセスの行く末を導くことが出来るのです。私は貴方方とともにあります。さあ皆さんそれぞれ心から唱えましょう。住まいのない家族はあり得ず、土地のない地方workerはあり得ず、rights（権利）のないlaborはあり得ない。また、sovereignty（主権）のないpeopleはあり得ず、尊厳のない個人はあり得ず、豊かな子供時代のない子供はあり得ず、明るい未来を描けない若者はあり得ず、尊者の高齢期を享受しないお年寄りはあり得ない。皆さんのstruggleを続けて下さい。そしてどうか母なる地球に大きくケアの手を差し伸べて下さい。私を信じて下さい。私は心の底から誠実に皆さんと共に皆さんのために祈ります。父なる神が皆さんに寄り添い皆さんを祝福し、この旅の道すがら、神の愛で皆さんを満たし、皆さんを守りますように。皆さんが父なる神に請うとき、豊かな力が与えられ歩みを続けられますように。･･･この力の源は希望です。これは重要なことです。何故なら希望は決して絶望しないからです。一つお願いします。どうか私のためにも祈って下さい。もしお祈りできない方がいらしたら、それはそれで尊重します。その場合は私に、貴方の考えとエネルギーを送って下さるようにお願いします。ありがとうございました。

1. ヨハネス23世　マーテル・エト・マジステラ　(15 May 1961), 3: [↑](#footnote-ref-2)
2. PAUL VI, Encyclical Populorum Progressio (26 March 1967), 14 [↑](#footnote-ref-3)
3. 教会の社会教説綱要、157 [↑](#footnote-ref-4)
4. 南米・カリブ海司教団　第五回総会　*Aparecida Documents* (29 June 2007), 66. [↑](#footnote-ref-5)
5. JOHN PAUL II, Post-Synodal Apostolic Exhortation *Ecclesia in Africa* (14 September 1995), 52: AAS 88 (1996), 32-22; ID., Encyclical Letter *Sollicitudo Rei Socialis* (30 December 1987), 22: AAS 80 (1988), 539. [↑](#footnote-ref-6)
6. Bull of Indiction of the Great Jubilee of the Year 2000 *Incarnationis Mysterium* (29 November 10 1998),11: AAS 91 (1999), 139-141. [↑](#footnote-ref-7)